

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 64 号

2012 年 9 月

日本薬史学会2012年会（東京）のご案内

年会長：津谷喜一郎（東京大学大学院薬学系研究科）

日本薬史学会2012年会を2012年11月17日（土）に東京大学薬学系総合研究棟において開催します。本年会では口頭発表による一般演題16題に加え、年会長講演、特別講演、さらに年会後には懇親会も予定しております。特別講演は、台湾・国立精華大学歴史研究所の雷祥麟博士による「漢医学研究の研究戦略－1920年代台湾における杜聰明の医学思想－」（日本語訳）で、京都大学で博士号を得た杜聰明の医学思想や、漢医学研究の方法論としての“54321”と“12345”の戦略などについてお話しいただきます。

皆様のご参加をお待ちしております。詳しい案内は学会 web よりご覧下さい。<http://yakushi.umin.jp>（現在、新しい web design に移行中です）

日本薬史学会2012年会（東京）プログラム

受付開始（9：30～）

開会の挨拶（10：00～10：05）

日本薬史学会2012年会会長 津谷喜一郎

口頭発表1（10：05～11：05）

1. 漢方処方における薬用量と調製方の関係－多味剤と大剤について－

鈴木達彦（東京理科大学）

2. 石見銀山「いも代官」井戸平左衛門と医師・中嶋見龍および錦織玄秀“診察録”について

成田研一（鳥根県薬剤師会江津・邑智支部）

3. 日向薬（くすり）事始め（その14）－日向における種痘の歴史－再考（Ⅱ）

岸信行^{1,2)}、高村徳人^{1,3)}、宇佐見則行⁴⁾、山本郁男⁵⁾

¹⁾九州保健福祉大学 QOL研究機構、²⁾宮崎・日向・富高薬局、³⁾九州保健福祉大学薬学部、

⁴⁾奥羽大学薬学部、⁵⁾前・九州保健福祉大学薬学部

4. 明治時代の局方における「錠」の日本名とラテン名

五位野政彦（東京海道病院・薬剤科）

年会長講演 (11:05 ~ 12:05)

薬効評価の回り灯籠

日本薬史学会 2012 年年会会長 津谷喜一郎

昼食・休憩 (12:05 ~ 13:10)

日本薬史学会理事・評議員合同会議 (12:10 ~ 13:00)

伊藤国際学術研究センター 3F 中教室 (東大赤門そば)

口頭発表 2 (13:10 ~ 14:10)

5. 新渡戸稲造と星一の交流

三澤美和 (日本薬科大学)

6. 星薬科大学に保存されていた国内初のキナ栽培に関する一次資料

南雲清二 (薬史学会会員)

7. 薬物学書に見る消化性潰瘍治療薬の歴史の変遷 - 明治から現代まで -

大谷聡子、海保房夫 (東京理科大学薬学部)

8. 近代西欧医・薬学発祥史 第9報 薬物有効成分の単離と特定

辰野美紀 (日本薬史学会)

特別講演 (14:15 ~ 15:15)

Research Strategy of Chinese Medicine : A Case of Dr. Tsungming Tu in the 1920's Taiwan

Sean Hsiang-lin LEI (Insitute of Modern History, Academia Sincia, Taiwan)

口頭発表 3 (15:20 ~ 16:20)

9. Drug Information, Clinical Pharmacy, Pharmaceutical Care が日本の薬学に与えた影響

赤木佳寿子 (一橋大学大学院社会学研究科)

10. わが国における医薬品開発 25 年史 - キラル医薬品について

榊原統子¹⁾、吉岡龍藏²⁾、松本和男³⁾

(¹⁾一般財団法人日本医薬情報センター、²⁾田辺三菱製薬 (株) プロセス化学研究所、

³⁾京都大学化学研究所)

11. 緊急安全性情報の歴史

高橋春男 (一般財団法人日本医薬情報センター)

12. 事業構造から見る血漿分画製剤市場の歴史の変遷

坂上裕一郎、津谷喜一郎 (東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学)

口頭発表 4 (16:20 ~ 17:20)

13. 清代・民国期重慶の薬材流通

石川晶 (学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻・博士後期課程)

14. ユダヤ人と薬 - 西フランク王に仕えたユダヤ人医師をめぐる問題 -

田中玉美 (名古屋大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC)

15. グラーツ(オーストリア)の薬局と Spital (救貧院)

石田純郎(岡山大学医学部非常勤講師)

16. 1980年代以降の米国ワクチン産業：医薬品行政による戦略転換

ジュリア・ヨング(法政大学)

次年度年会長挨拶(17:20)

日本薬史学会2013年会会長 高田昌彦

閉会挨拶(17:25)

日本薬史学会2012年会会長 津谷喜一郎

懇親会(17:40～19:40)

伊藤国際学術研究センター1F
レストラン「カメラリア」

会場：東京大学薬学系総合研究棟 2F講堂

東京大学本郷キャンパスの会場マップは次ページにあります。

会場へのアクセス、詳しいキャンパスマップなどにつきましては東京大学ホームページをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/index_j.html

日本薬史学会の web から年会の web に入ってもご覧いただけます。<http://yakushi.umin.jp>

参加申込方法

次ページ申込書を郵送または FAX にてお送りいただくか、申込書と同様の項目記載の上、E-mail にてお送りください。

すでに参加申し込みをされた方の再度申し込みは不要です。

〈参加申込書の送付先〉

日本薬史学会2012年会(東京)事務局(事務局長：根岸辰太郎)

住所：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学

電話：03-5841-4828 FAX：03-5841-4829

E-mail：yakushi2012@gmail.com

申込締め切り

事前参加申し込みは2012年10月31日をもって締め切り、それ以降は年会当日とさせていただきます。

口頭発表に関するご案内

発表時間は質疑応答を含め15分です。運営・進行のため、時間厳守をお願いいたします。講演ではノートパソコンとプロジェクターを使用します。ノートパソコンはこちらで用意いたしますが、特殊な使用方法をされる方は対応しかねますのでご注意ください。

ご発表の方は11月15日(金)正午までに、ファイルを e-mail で事務局にお送り下さい。当日持参の場合は発表の1時間前までに受付にお申しつけ下さい。

日本薬史学会 2012 年会(東京)

参加申込書 FAX:03-5841-4829

フリガナ													
氏 名													
所 属													
住 所													
t e l		f a x											
e-mail													
<p>参加費（○で囲んでください。参加費は、当日受付にて徴収いたします）</p> <p>1. 日本薬史学会 2012 年会（東京）</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">会員</td> <td style="text-align: right;">¥4,000-</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">非会員</td> <td style="text-align: right;">¥6,000-</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">学生</td> <td style="text-align: right;">¥1,000-</td> </tr> </table> <p>2. 懇親会</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">会員および非会員</td> <td style="text-align: right;">¥5,000-</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">学生</td> <td style="text-align: right;">¥1,000-</td> </tr> </table>				会員	¥4,000-	非会員	¥6,000-	学生	¥1,000-	会員および非会員	¥5,000-	学生	¥1,000-
会員	¥4,000-												
非会員	¥6,000-												
学生	¥1,000-												
会員および非会員	¥5,000-												
学生	¥1,000-												

<キャンパスマップ>



日本薬史学会賞公募のお知らせ

日本薬史学会褒賞規程にのっとり、2012年度日本薬史学会賞など3賞の推薦者の公募を行います。多数のご応募をお待ちしております。

推薦者（自薦・他薦）および受賞者資格

推薦者（自薦・他薦）および受賞者の資格は、本会の会員であること。

賞の種類および趣旨

1. 日本薬史学会賞：薬史学に関する学術の進歩発展に顕著な功績をなした者に対して授与する。
2. 日本薬史学会奨励賞：本学会の活動において、顕著な貢献の可能性を示している者あるいは活発な研究発表を行っている者に対して授与する。
3. 日本薬史学会特別賞：高度な学術的貢献または本会の維持運営に特に功績のあった者に対して授与する。

選考方法

日本薬史学会褒賞規程に従い、数名の選考委員（本会会長および理事5名）からなる選考委員会が応募書類等で内容を審査し、受賞者の選考を行います

受賞者には、賞状及び副賞として金一封を贈呈します。来年度本学会総会時に授賞を行います。

応募方法

推薦者（自薦・他薦）は、下記の推薦様式により2012年10月30日（火）までに、日本薬史学会事務局

（下記住所）宛郵便で申請して下さい。

推薦様式

1. 推薦書類は、A4版用紙に記載する。
2. 推薦書類は、次のとおり。
 - (1) 推薦書（2ページ以内で次の内容を含む）
 - a 被推薦者の氏名、所属、職名
 - b 推薦する理由（業績タイトルをつける）
 - (2) 被推薦者の履歴書（1ページ）
 - (3) 関連する業績リスト（形式不問）
 - (4) その他必要事項（資料・コピーを含む）
3. 推薦書類の送付先：
〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16
（財）学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局
日本薬史学会賞選考委員会委員長
TEL (03) 3817-5821

参考（過去の日本薬史学会賞受賞者）

- 2006年度 米田該典
（大阪大学医学部医学史資料室）
「緒方洪庵のくすり箱とその内容薬物について」
- 2007年度 宮崎正夫
（元松山赤十字病院薬剤部）
「シーボルトの処方箋に関する研究」

柴田フォーラム2012年報告記

編集委員 小清水敏昌

東京の最高気温が32.6℃を示した2012年8月4日（土）、柴田フォーラムが東京大学大学院薬学系研究科の総合研究棟10階の大会議室で午後1時30分から始まった。参加者は50名余で、はじめにフォーラム担当の相見則郎委員長から講演概要および3名

の演者の紹介があった。

最初は**武田幸作先生**（東京学芸大学名誉教授）による「花の青色発色機構、特にヤグルマギク、ツユクサ、アジサイなどの青について」。座長は相見則郎フォーラム委員長。武田先生は、薬学なのに薬に

ならない植物の色を研究しているとの前置きの後、アントシアニンが酸性では紅色、アルカリ性では青色を示す。花の色の研究は、昔から多くの研究者によって行われていること。1913年にヤグルマギクの花の青い花に含まれるアントシアニンの構造を決定し発表したのはドイツ人であった。

しかしその後、日本の柴田桂太は花の青色はアントシアニンと金属元素の錯体によって発色していることを1919年に発表した。いわゆる金属錯体説で、鉄、マグネシウム、カルシウムなどが複雑に絡んで、アジサイの青くなっているのはアントシアニンとアルミニウムとの錯体だからであると。これに対して、海外では異なった考えがあるという。

武田先生は青色の花から色素を純化しその構造を解析する研究を行ってきた。わが国の植物学・植物生理学は100年以上前から研究され世界的にも発展してきた。

われわれは季節ごとに色とりどりの花を眺め美しいと感じるが、そうした現象を科学的に解明されてきた武田先生や先人たちの研究のお話に感銘を受けた。

2席目は『中国薬学会百年史』と中国薬学会薬学史専門委員会の活動」と題して、はるばる中国から来られた**郝近太先生**（中国薬学会薬学史専門委員会主任委員）の講演。座長は**真柳 誠先生**（茨城大学教授）。通訳は東大薬学大学院生の唐文涛氏。

最初にスライドを用いて郝先生が中国語で中国薬学会の歴史や委員会の紹介などについて簡潔に述べた。中国薬学会は中国で最初に創立された科学学術団体であるという。その設立はなんと日本で行われ、当時わが国で薬学を学んでいた留学生たちによって1907年春に東京水道橋の明楽園で産声を上げた。第1回の中華薬学会が1909年開催され20名ほどが集まった。

その後、日中戦争が勃発したためその活動は下火となった。戦争が終わり、中国は新たな政治体制となった1952年に中国薬学会第1回会員代表大会（通算で第13回）が北京で開催され、中国の薬学は少しずつ発展してきた。2007年には中国薬学会百年を

北京の人民大会堂で祝った。

薬学史については、中国では1983年に中国薬学会の下部組織として薬学史専門委員会が正式に設立している。現在、中国の薬学会の下には15の専門委員会があり、刊行物も20誌発行している。中国の薬学史研究は基本的には中薬、本草の歴史を巡って展開されたため、現代西洋医学薬学の歴史に関する研究は少ない。日中両国の薬学史従事者がその研究面での交流を通し、この学問が発展していくことを願っていると述べて講演を終えた。

フロアからの質問に対して、中国では新しい刊行物は政府の厳しいチェックがありなかなか出版が許可されない事情があり、薬史的な論文は他の雑誌へ投稿してしまう。中国でも薬学史の教育にはあまり熱心に取り組んでいない由。

3席目は中国からの演者で**梅全喜先生**による「新中国における李時珍の研究史—過去60年のあゆみ」。通訳は石川 晶氏。李時珍は西暦1518年に生まれ、「本草綱目」を29年間にもわたり研究し、その結果、1892種の薬物、11096種の処方解明した。17世紀になると世界的に知られるようになる。中国では李時珍による研究が大きく評価されていて、墓の整備、記念切手の発行、伝記映画、李時珍の名を冠した病院の設立、研究会や研究所の設立などが行われている。演者の梅先生も研究所の所長で、出版物の編集などにも名を連ねている。

来年の10月に李時珍の没後420周年を記念し、中国薬学会の薬学史分会創立30周年学術会議を湖北蕪春で開催するので、日本から多くの参加を期待すると最後に述べた。李時珍については中国では超有名な学者であることを今回の講演で知った。

なお、2席目と3席目の演題が案内当初と異なっていた。

閉会后、場所を移し隣の建物である薬学図書館1階ロビーで即席の懇親会が開かれた。

20名以上が参加し、3人の演者の先生も打ち解けた様子で多くの人たちと歓談。

記念撮影をして午後7時前頃にお開きとなった。

北海道支部だより

支部長就任のご挨拶

日本薬史学会 北海道支部
支部長 高田 昌彦

私は2012年6月に、昨年11月急逝された齋藤元護先生の後任として支部長に選任されました。

私にとって重すぎる任ではありますが支部発展のため会員のご協力を得て任無を果たしたいと決意しております、どうぞ宜しくお願い致します。

齋藤元護先生は、常日頃支部活動の基本理念として「温故知新」の精神を強調されました。私はこれからもこの基本理念を大切にして支部活動に生かして行きたいと念願しております。

当支部当面の重要課題としては来年秋に札幌で開催予定の日本薬史学会2013年度年会の準備があります。さらに2014年度には支部創立10周年の記念行事を予定しており、その際記念誌の発行もあり、今から準備が必要です。特に2013年度年会は全国規模であり、参加される会員のために北海道カラー

を盛り込んだ魅力ある年会にしたいものです。支部会員のご協力を得て成功に導きたいと念願致しております。

支部通例の行事としては北海道薬学大会薬史部会があり、その一層の内容充実を図る必要があります。また毎年秋に北海道医史学研究会と共に「合同学術集会」を開催しております。医・薬両専門分野から研究成果が発表され、特別講演に加えて懇親の場もあり、会員にとって知見を豊かにし、親しく交流の輪を拡げて欲しいものです。多くの会員の参加を願っております。

今後は会員の皆様への情報提供を積極的に行い、意志の疎通に努めたいと計画しております。

終わりに、重ねて会員の皆様のご協力をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

東海支部だより

日本薬史学会東海支部第4回例会研究会予告

日 時：2012年12月1日(土) 14:00～16:00

場 所：名城大学名駅サテライト(MSAT)

名古屋市中村区名駅3-26-8 名古屋駅前
桜通ビル13階

地下街ユニモール④番出口出ですぐ

Tel 052-551-1666

演 者：越川次郎(中部大学)

「名古屋の売薬について」14:00～

加藤宏明(伊勢くすり本舗)

「伊勢参りと萬金丹」15:00～

連絡先 飯田耕太郎(名城大学薬学部)

〒468-8503名古屋市天白区八事山150

Tel 052-839-2710 Fax 052-834-8090

E-メール iida@meijo-u.ac.jp

関西支部だより

第5回 日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部 研修会世話人 宮崎 啓一、多胡 彰郎

2012年1月21日(土)、16時30分から、「くすりの道修町資料館」(大阪市中央区道修町)において、

「第5回日本薬史学会関西支部研修会」が開催されました。今回は宮本義夫先生(くすりの道修町資料館

館長、日本薬史学会・評議員)を講師にお招きし「道修町と江戸時代の薬種中買仲間」と題してご講演いただきました。研修会には初参加の方も含め15名が参加されました。

宮本先生は、本講演におきまして「くすりのまち」道修町の成り立ちを日本史とのかかわりから、中世から現代までを、1. 大坂の発達、2. 道修町の形成、3. 薬種屋仲間の集住地、4. 道修町薬種中買仲間が株仲間として公認、5. 薬種中買仲間の役割、6. 道修町文書大阪指定文化財となる(2007年4月6日)、の6部構成で解説くださいました。

大阪の市街地の形成は浄土真宗中興の祖、第8世蓮如上人が1496(明応5)年に上町台地に建立した大坂石山本願寺の寺内町の形成に始まるといわれます。石山本願寺は海上交通の便に恵まれ、諸国門徒の往来も激しく寺内町も繁栄し、諸国大名に脅威を与える存在になりました。第11世顕如上人の時代1570(元亀元)年以來11年におよぶ織田信長との交戦「石山合戦」が終結しましたが、本願寺の寺内町は焦土と化してしまいました。この地を再興するのは時代の覇者、豊臣秀吉であり、1583(天正3)年に大坂城を築き、伏見、堺、平野郷の町人が集住し、城下町が形成されたものの、1614(慶長19)年の大坂冬の陣および1615(元和元)年の大坂夏の陣で市街地は荒廃し、町民は離散しました。次に市街地の復興の役についた徳川家康の外孫、松平忠明^{ただあき}はまず大坂の人望のある富豪を元締め衆として町割りをさせ、水帳を作らせ町ごとの繁盛の差異や経済力の差によって等級をつけ、また各町の有力な町民を町年寄とし地子(土地・屋敷の税)を徴収し、堺や伏見、平野郷の住民を移住させました。松平忠明はもっぱら市街地の復興につとめたことにより、1619(元和5)年、幕府の直轄地になるにおよんで大坂の地は著しく発展しました。

道修町の北隣の伏見町では、既に天正年間(1573~1591年)に加賀の齊藤氏が豊臣秀吉に従って大坂に移住し、唐産の茶番御用をつとめ、舶来品取扱いの業を始めました。舶来品のうち反物を扱うものは伏見町に居住し、薬種その他のものを扱うものは「伏見町東横堀」に移り、「唐薬問屋」を称しました。唐

薬を仕入れるとともに国産の取扱いをする薬種屋が漸次道修町、平野町、淡路町周辺に集まってきたものと思われております。

「株仲間」とは江戸時代に江戸、京都、大坂等で幕府、諸藩において認可された独占的な同業の商工者の集団です。「株」とは株仲間の固定的・排他的な営業権を意味します。

1722(享保7)年、薬種中買仲間124軒は「株仲間」として幕府から認可されました。その後、「和薬改会所」が設置され、講習を受けた薬種屋が交代で会所において在方より集まる薬種の基原等について、鑑定を行うように取決められました。

しかしながら、大坂では「和薬改会所は煩雑であり唐薬種の商売に差し障りがある」として、薬種屋20軒が和薬問屋をつくり、和薬の改めは和薬問屋が扱うことになりました。従ってこの20軒以外には和薬を直接に扱うことはできないのですが、実際には江戸で和薬改めの講習を受けているので、1735(享保20)年「薬種中買仲間」という名称で唐・和薬を扱う株仲間としての存続は許されました。この頃の薬種商の軒数については1768(明和元)年の『仲間最初書』によると、薬種仲買、問屋、小売等で1000軒近くの薬種業者があったことがわかります。

薬種中買仲間124軒は1868(慶応4)年まで140年余にわたり、協力して道修町で和漢薬種の営業を支え続けていき、品質の吟味された薬種が正確な入れ目で日本全国に統一価格で流通することになります。薬種は全国の医師により、また合剤は製造する合薬屋により、末端の医療分野に供給されることになります。

平成19年4月6日に大阪指定文化財に指定された道修町文書(くすりの道修町資料館所蔵)は、1724(享保9)年の「妙知焼け」、1837(天保8)年の「大塩焼け」、さらに第二次世界大戦の大坂空襲等の災禍からも奇跡的に免れ、現在まで伝えられており、江戸時代の経済史や流通史の研究に貴重な材料として提供しております。

研修会場では十分な質疑応答の時間を確保できないこともあり、場所を交流会場に移して活発な意見交換がなされました。

今回の参加者につきましては、当学会会員に非会員1名を加え、計15名(懇親会 計13名)でありました。

宮本先生はくすりの道修町資料館館長を平成21年から4年間、ご専門領域であります「薬学」の切り口から当資料館の発展に尽力されました。



研修会場にて

本年4月に退任され、現在名誉館長として継続して資料館の発展を見守っておられます。

宮本先生がご健康で、精力的なご研究を続けられますことを祈念して、「第5回日本薬史学会関西支部研修会」および「交流会」は盛会裏に閉会いたしました。



交流会にて

1980年から Medline に掲載されていた薬史学雑誌

2012年7月17日に五位野政彦常任理事から興奮気味のメールがあり、PubMedに「薬史学雑誌」が掲載されているとの由。調べると1954年設立の日本薬史学会は12年後の1965年から薬史学雑誌を発行し、1980年からMedlineにindexされている。Medlineは世界の約5,000の広義の医学雑誌をカバーしており、その内米国からが約40%、日本からは約180誌(3%)が掲載されている。日本には全部で約2,500の医学雑誌があり、その7%が掲載されていることになる。なおPubMedはMedlineとPubMed Central (PMC)から成る。後者はfull textが無料でアクセスできる雑誌や論文である。PMC

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

への掲載はやや容易だがMedlineへの掲載は困難で、日本の多くの医学雑誌はMedline掲載を希望すが応募しても失敗するのが常である。Medlineの作成運営母体の米国National Library of Medicine (NLM)は歴史にも力を入れており、日本医史学雑誌は1967年から掲載されている。わたしの知る範囲で、日本薬史学会関係者でこれまで薬史学雑誌がMedlineに掲載されたことを知っているものはおらず、32年ぶりに「発見」されたことになる。めでたいニュースである。

[参考文献：津谷喜一郎。よい雑誌とよい論文。
臨床評価 2012；39(3)：475-84]

小倉豊さんを偲び、思い出を綴る

私の書斎の片隅に数冊のアルバムがある。その中に薬史学会での英国、オランダ、ドイツ、北欧、中国などの海外の旅で、小倉豊さんと共に歩き回った

薬史学会前会長 山川浩司

時の写真がある。海外ばかりでは無い、二人で千葉市美術館の浮世絵展を見た後、千葉の中華料理店で、また上野の科学博物館の医学会総会「医学教育展」

を見て回った後、伊豆菜で名物のうなぎを食べながら、薬史についての多くの話題を論じ合った事などを思い出します。

私の手元に小倉、寺沢さんが翻訳した Cowen, Helfand: Pharmacy, H. N. Abrams, Inc., New York, 1990の私家版がある。小生の「国際薬学史」南江堂、にも参考にさせていただいた。また小倉さんは薬史学会の運営へ多くの貢献をされた。多くの理事の方々は感謝に堪えない思いをしています。心筋梗塞から入退院を繰り返し、さらにガンを併発しての療養生活を余儀なくされました。

二人で様々な薬史研究の企画や研究、多くの展覧会を見て回る望みも断たれ、余りにも早い別離の旅

立ちをされたことは無念でなりません。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌



英国貴族の旅でバッキンガム宮殿の衛兵の横に立つ小倉さん(右)と筆者

〔新刊紹介〕

「医心方」の現代語訳出版完結

丹羽康頼撰の「医心方30巻」(984年)の榎 佐知子氏による現代語訳(初訳33冊 A5)は、最終刊「薬名考」(425頁)が発刊されて完結。筑摩書房。2012年7月25日。712,068円

「医心方」は隋の医書を参考に、病名を分類して構成、内容は医学全般に亘り、本草・養生・房中に及ぶ。主な伝本に半井家本と仁和寺本の2系統があり、いずれも国宝である。榎 佐知子氏は、医師でも薬剤師でもないが、独学で「医心方」、「大同類聚方」の難解な漢文、日本古代文を現代語に訳した。同氏はすでにその業績により1986年菊池 寛賞、1987年にエイボン功績賞を受賞した著名な作家であり、古代医薬史研究家である。今回、津村重舎氏の基金を得て、40年かけて解説した「医心方」の現代語訳を初訳33冊として出版した。

奇しくも、丹羽康頼生誕1100年の今年、「医心方」の現代語訳の出版が完結したことに対し、榎 佐知子氏に敬意を表し、祝意を送りたい。

その最終刊が「巻1B、薬名考、30,000円」であったため、薬史学を学ぶ者の1人として、「薬名考」の出版を待ち続けた。発刊後、直ちに筆者の旧勤務先

であった名城大学の図書館事務室へ行き、「薬名考」を借用した。

「薬名考」の序文には、15頁にわたって「日本の医薬の歴史」が書かれているが、「医心方」を現代語に翻訳した榎氏でなければ書かれ得なかった内容で、一読をお勧めする。

また「薬名考」の内容は第十章諸薬の和名と題し、新修本草に書かれている薬剤、すなわち玉石部の上品(じょうほん)(22種)、中品(ちゅうほん)(30種)、下品(げほん)(31種)、草部の上品(79種)、中品(76種)、下品(102種)、木部の上品(27種)、中品(28種)、下品(45種)、獣鳥部(56種)、虫魚部(72種)、果実部(25種)、菜部(38種)、米穀部(28種)、有名無用薬(193種)の852種のほか、本草外薬剤(70種)について解説されている。

上品は毒性はなく、中品は毒性はないか少なく、慎重に投与すれば病気を治療し補益したりできるもの。下品は毒性が強くて長期の服用はできないが、病気の症状を解消できるものをいう。

「薬名考」は薬についてまとめて書かれており、その他の32冊の内容にも関係するため、出版が最後

になったものと思われる。

日本の古代の医薬のうち、正倉院の薬物については、その解説書に英文の説明があるが、「医心方」につい

ても、英文、仏文に翻訳出版されることを望みたい。

(奥田 潤)

〔新刊紹介〕

木村誠 著

「消える大学・生き残る大学」

朝日新書、(朝日新聞出版) 2011年4月刊

データでわかる日本の未来「危ない大学」洋泉社 MOOK 2011年6月刊

20世紀末の規制緩和の風潮で、昭和58年設置の摂南大薬学部以降15年間設置されなかった薬科大学(薬学部)の急増設が続いた。大学設置を望む学校経営者とそれに加担する無責任な薬系団体によって急増設された薬科大学(薬学部)は、今、薬学教育六年制を契機として学生定員の大幅割れにより、学校経営に赤信号が灯った大学が十数校になる。週刊誌な

どで多く取り上げられてきたが、薬科大学関係者のみでなく医療の担い手となる薬剤師の養成について、優良な新設校もある中で、上記の2書は学生定員数50%割れの大学をデータで示した警告書でもある。都市に回帰する傾向と統廃合が今後の課題となるであらう。

(山川浩司)

〔新刊紹介〕

船山信次 著書

「毒草・薬草事典」

サイエンス・アイ新書

238頁、952円(ソフトバンク クリエイティブ(株) 2012年6月刊

本会評議員、日本薬科大学の船山教授が、新著として表記の新書を発刊された。我が国の植物園をはじめ全国の山野を巡り歩くと多くの草花の植物を見かけ興味を魅かれる。しかし花の時期は短くて多くの人々に取っては、これらの植物を特定する事は難しい。ましては薬草と毒草を区別する事は無理である。

本書はこれらの植物を、序章 毒と薬の植物、第1章 命にかかわる毒草・薬草、第2章 意外な毒草・薬草、第3章 和漢薬・西洋薬と毒草・薬草、

第4章 食物と毒草・薬草、第5章 園芸植物と毒草・薬草 の広範囲について、豊富なカラー図鑑を付して解説した新書となっている。最近は図鑑類が少なくなっているのが有難い。意外と思われる植物が毒草であることを知った。平易に述べられている解説と適宜に挿入されている歴史的な逸話は興味深く読める。職業柄、評者にとっては化学構造式には興味を引かれる。

(山川浩司)

日仏薬学会創立40周年記念講演会

日仏薬学会創立40周年記念講演会が、2012年9月30日(日)、日仏会館(東京都渋谷区恵比寿3-9-25)で、午後2:30より開かれます。本学会

理事で日仏薬学会前会長・竹中祐典先生が「日仏薬学交流40年」と題して講演を行います。

薬史往来 私の薬学入門

名誉会員 川瀬 清

1943 (昭和18)年、旧制中学校卒業に際し、やがて軍隊に入る身として、武器を持たぬ部署、衛生部—それも薬剤部に目標を置き、海軍 (効率配置のため、薬剤官は病院船以外には乗らず) 委託生徒応募を予定して、東京薬学専門学校に入学しました。家は農家で、父も無学ながら薬草には興味を示していました。薬剤官委託生徒には2年次生の時に合格し、以後毎月25円の受給を得て通学しました。私にとって大金の「高瀬豊吉：化学構造と生理作用 (カニヤ書店、1941) 25円」も購入できました。けれど太平洋戦争は急転し、通年勤労働員令発令、クラス全体が世田谷用賀の「陸軍衛生材料廠」での作業を命じられ、授業は事実上不能となりました。

かかる状況下で海軍は、既に、大学薬学部・薬学専門学校に教育を委託していた学生・生徒を呼び寄せて基礎訓練をし、秋季の卒業と同時に就任させる事を企て、1945 (昭20)年4月15日、広島県賀茂郡 (東広島市黒瀬町) の賀茂海軍衛生

学校に集めました。

総員130余名が、一緒にハンモック・麦飯生活、手旗信号も習いました。

そして8月6日に原爆投下。広島へ20余キロの位置から経験し、私の人生の区切りとなる影響を受けました。「いったい自分はどの様な時間に生きているのか、全く無自覚であった」ことに気付かされました。偏狭な軍国主義は論外として、旧来の薬学教科が「西欧で医薬として開発した物質の本質を追求し、わが手で作る」ことに集約されるわけで、薬物治療学・薬理学の本を開いていると「偽医者勉強はするな」という目つきで睨まれるのでした。徒弟制度そのものの日本教育界に改革が必要との思いが高まりました。一方農学部の編成配置を見ると、自然・社会の両科学に属する学科目が種々配置されています、そこに薬学改革のモデルを発見しました。薬学関連の分野で、どのような研鑽がつまれているか、その鍵を握る「歴史」に先ず目が向かって今日に至っております。

会員へのお問い合わせ

23年度の会費振り込みの件で、お振込みいただきました会員名が不明なものがございました。振込取扱店は「西友荻窪」、振込年月日は平成24年6月6日、金額は一般会費7000円でございます。お心遣いの方は、事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第64号 2012年9月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 JSHP：The Japanese Society for History of Pharmacy

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel：03-3817-5821 fax：03-3817-5830 <http://yakushi.umin.jp> e-mail：yaku-shi@capj.or.jp